

シ一定ノ方針ヲ指示スヘキ行政組織ナカル可カラサルナリ苟モ
海外諸邦ト頡頏シ衝ヲ中原ニ争ハントスレハ則チ我カ全國ノ美
術力ヲ收攬シテ先ツ其中堅ヲ戒メ而シテ先鋒後勁各々其指揮ヲ
遵奉セシメサルヘカラス——下略——

『国華』創刊号。明治二十二年十月。発刊の辞。無署名である
が、岡倉の執筆と考えられる。



参考資料

東京美術學校回顧談

今泉雄 作君

今日何か當校の開創の時の回顧談をせいと云ふ事でございますが、實は私も大分年を取りましたので、モウ三十年にもなりますから誠に何時どう云ふ事が有つたか、マア年はどうやら斯うやら覺へて居りますが月日に至つては殆んど記憶にございませぬ、併し先づ大凡の事をお話を敢しましたならば——或は少々前後致すこともあり或は間違もありますかも知れませぬが——マア自分の経験しましたこととございませぬからさう大した間違は無いと思ひますから其積りでお聴きを願ひます。

當校が抑々出来ました最初と云ふものは私が西洋から歸つて参つたのは明治十六年の二月でございます、處が歸つて來ますと色々世話をして居る者がありまして遂に文部省の御用掛を拜命した、處が其時分文部省の専門學務局へ出仕せろと云ふ、専門學務局の御用掛と云ふ者は一體どんなものであると言ふと、餘程お役人様じみて

無い妙な者でありまして、書生の集り大抵大學を卒業した人が多いので、夫れが御用掛と云ふ者になる、詰り其仲間へ這入りましたのですが、私は大學の方に關係なしに這入つたので判任の御用掛でありましたが大抵は奏任の御用掛でありました、詰り昨日まで書生をして居つた者が大勢居てワイ／＼言つて居る處へ私が参つたのが明治十六年の五月であります、處が此御用掛と云ふ者は何をするかと言ふと、何も用はない、唯下らない事を毎日行つて取調べるとか言ふは言ふけれ共、今から考へると取調べも何もしない、詰り唯月給を頂戴して毎日専門學務局へ出て居ると云ふのが用のやうなものでありません、處が毎日出ては何か議論をしたり下らない事をしてそれで歸つて來ると云ふやうな譯だ、處が明治十七年の何月でありましたかそれは覺へませぬが岡倉覺三君でありましたか、高橋健三君でありましたか覺へないが、誰かの随分詰ららい畫であつたと覺へますが其詰らない畫の書卸しのやうな物を二三枚持つて來て是はどうか好く出來て居るとか悪く出來て居るとか云ふやうな事で、我々が寄合つて旨いとか拙いとか云ふやうな事を言つて居る、其時にどなたであつたか能く覺へませぬ、千本福隆君であつたか知りませぬが、歴史畫が何かなら世の中へ益があるが斯んな花鳥の畫ぢや詰らない、斯んな物を畫に描く程の事は有りはしないと、斯う一つ論が出た、其時に高橋健三君岡倉覺三君を初とし、イヤ是は怪しからん事を承はる、決してさう云ふ譯のものぢや無い、抑々畫と云ふものはと云ふ風で例の講釋が出る、それから議論が始つて大分喧ましいことであつた、半日はかりは其爲に暇を潰して了つた、私も其席に居たが同じく畫の方に賛成な譯でありますから、それに其時分は洋

行歸りでありますから大分鼻息が強い(笑)全體日本で畫など云ふものを輕々しく見るからさう云ふ事になる、佛蘭西などでは美術省と言つて文部省に附屬して美術と云ふもので一省が立つて居る位のものだ、それが文部省に附屬して居ると云ふ勢で畫や彫刻を奨勵して居る、それを日本では畫なんぞと云ふ物は詰らぬ花鳥を描かうが何だらうがそんなもので無い、畫には畫の眞理があると云ふ事を言つて大分其方に賛成しました、それでマア色々な事を言つて、爲に又半日ばかり暇を潰して了つた、愈々三時になつて引けると云ふので、外に出ると其時分に岡倉覺三君が小網町の御宅へお歸りなされるので色々話をしてブラ／＼行く、私は其時分から根岸に居ました、それだから根岸へ歩いて行くのにブラ／＼話して行くと岡倉君も一緒に喰付いて來ると、チョイと君に話したい事がある、それぢや僕の家へお出でなさい、イヤ君の家までは行けない。それぢや何處かへ寄らうと言つて、其時分の御話を申すと可笑しいが、三枚橋、今では三枚橋と言つても何だか分らなくなつたが、あの橋の手前の角に牛肉屋があつた、其牛肉屋へ這入つたが誠に小さな家で婆さんと女が一人居る位な牛肉屋だつた、處が其二階に誰も居ないから牛肉を喰べ乍ら實は己は疾くから考へて居ることがあるのだが、今日は大分議論が始まつたので一つ其事で御相談をしようと思ふ、ハア然うですかと云ふ譯でした、全體其時分美術と云ふ名が無い……畫だの彫刻だの……アレを一つどうかしたら宜からうと思ふがどうだ君の考はと云ふお話、そこで私も佛蘭西ぢや然うなつて居るが、日本でもそれを一つやらうと思ふことは疾くから考へて居るが、それがどうも相談する人が無いので困る、一つ相談相手になつては呉まい

か、然うですか夫は相談相手にもなりませうが、どうも私は美術を習うて日本へ歸つて來て美術などの事を言はうとは些とも思はなかつた、全體私は佛蘭西へ留學に行つたのでも何でも無い、向ふに私立の博物館が出來て其博物館へ雇はれると云ふ約束で自費で日本を立つて向ふへ行つて博物館に雇はれて、博物館の仕事をする、それから段々佛語が分つて里昂大學などへ行つたことがあります、一向美術などをどうしようとは考へない、處が私は佛蘭西人と話をした中に一つ美術と云ふものはナカ／＼錢の儲かるものと云ふ感じを起した、それはどうだと言ひますと、唯今でこそ可笑しな事でありませうけれども、その美術と云ふ物が錢の儲かるものだと云ふ事を考へたのは、其時分の一體我々の感じと云ふものは外國人から金ばかり取られて居る、忌々しくて堪らぬ日本へ取ると云ふことは些とも無い、外國人の方にばかり取られる、外國人が來るとお辭義マツをしたり下らぬ色々な事ばかりして居るのが全體忌々しくて堪らぬと云ふ感じがある、それだから何かで一つ國益を考へなければならぬと云ふ、それは私ばかりぢや無かつたでせう、皆二言目には國益と云ふ事が出る位でありました。佛蘭西で暫く博物館に仕事して居ります内に、或人から日本の古物を澤山持つて居るから見に來て呉ると頼まれたので其處へ行くと天神緣起がある、何でも足利の末あたりアサに造つた天神緣起が六卷あつて、是が日本ではどの位するだらうと云ふ事を聞かれた日本では幾らの物でも無いけれ共餘り安く言ふのは忌々しい、其時分一卷が十圓位だから六十圓だけ共それぢや不可ぬ、一卷二十五圓で百五十圓と言つた方が偉い事だらうと思つて云つた。百五十圓といふと七百五十法ばかりに當る、先方はそれ

は分らないことだ、是はマスキリーだ、ナカ／＼そんな安い譯の物ぢや無い、處がお前の國では是が唯七百五十法位で、斯んな貴い物を賣るのか其上是は今からどの位経つて居る？今から五百年位経つて居る古物、マスキリーが七百五十圓と云ふ理窟が有るものぢや無い私の考では千五百法位はするだらうと考へる、そんな間違つた事は無いお前が分らないのだと斯う言はれる(笑)然しそんなに七百五十法だの千五百法だのと云ふ事ならば是は一つ晝などを獎勵したら錢が儲かるものだと思つた、そこで之を一つ獎勵すると宜いと云ふ事を考へたそれから牛肉を喰ひ乍ら其話をした、私は斯う云ふ事を考へたことがある、獎勵したら宜からうと思ふ、勿論然うだから今の美術と云ふことの考とは丸で違て居ります、其時分には錢儲けをしやうと云ふやうな考で専ら美術と云ふ物は宜いと云ふ位の考だ、そこで夫れぢやマアそう云ふやうな事にして、何しろ少しやらんければならぬと云ふので岡倉君が私は骨を折る、君は佛蘭西の物を些とは見て來たらうから君は書類を拵へて呉れ、斯う云ふやうな事で、牛肉屋の内話があつた、それでは幾らでも盡力しますと云ふので、是が抑々美術學校と云ふものを拵へやうと思つた始である。本年は文部省で美術院と云ふものが出來ましたが、詰りあの美術院と云ふものを文部省内に置く事を考へたのであります、夫れが岡倉君の考、私共は夫程の考は無かつたが岡倉君の美術院と云ふものを文部省で一つ拵へやうと云ふのに、佛蘭西の美術省の型を採つてやつたら宜からう、それは至極結構だと云ふので、それなら美術院はどう云ふ事をするのかといふと、美術の教育は勿論の話、それと美術貿易の事までも皆美術院でやる積りなんだ、それで

美術に關係したものを輸出する時に此美術院の許可を得た美術品で無ければ不可ぬ、美術院が許可しなければ貿易に出さぬと云ふ考でありましたからそれを一つやつたら宜からう、マア貿易までは實は關係しないやうにしてもしなくても構はない、それでやつたら宜からうと云ふので其時に書きました物は先年の學校の火事で大方焼失して了つたかも知れませぬが有る譯なんでございます、私の家に確か一冊位は有る譯でありますが、何處へ這入つて居るか今チョト分らぬ、實は持つて來たいと思つて探しましたがございませぬ、其帝國美術院を一つ拵へやうさうして夫れは文部省に附屬する、今の大學が文部省に附屬して居るような工合に一つやつたら宜からうと云ふのが岡倉君の考、それから夫れに従つて拵へたのが此位(五分)の菊蕪版刷であつた、それに美術院と云ふものは國家に必要で之を置かなければいかぬと云ふので頻りにさう云ふ事を書いた、それから官制から何かからスツカリ書いてありますが、此學校にも一冊位は有つたらうと思ふか残つて居りますかどうか知りませぬ、何しろ一冊より外無いと云ふお話ですから焼けて了つたのでありませうか、然う云ふ事から美術院を拵へて總て日本の美術の事は茲で以て統轄をしなければならぬ、斯う云ふ事を考へてそれを時の大臣森有禮閣下へ出した譯で、其前に元と岡倉君も専門學務局に居り私も居つたから局長にお話をしなければならぬが其局長は今の濱尾男爵の處へ岡倉君が行つて色々々の事を言つて大臣にお話をする、其時分は今から考へると詰り洋行歸りで鼻柱の強い時であつた爲かも知れませぬが、私などが大臣の處へ行つて色々喋舌り附たのですかどんな事を喋舌つたかと云ふ事は知らない無茶苦茶に喋舌つた、それで岡

倉倉は固より毎日のやうに行つたがナカ／＼文部大臣は言ふ事を聴かない、そんな事も有るか知らぬけれ共未だ不急の務だと言はれるので甚だ困つた、それから頻りと説いたけれ共ナカ／＼容易にはそれが出来ない、それからしてそんな事でゴタ／＼して居る間が凡一年でありましたが其間の経過が餘程面白い、何故ならば其経過の間に考へてどうも今に何か一つ之をやるには一味徒黨の連中が無ければ迎も出来はせぬからそれを集めなければならぬと云ふので段々美術の何だとか色々の名を付けて何の會だとか言つて其時分の外國人でブゲロー^{ブゲロー}など云ふ人が居ました亞米利加の金持等と懇談會を拵へる等、色々な事をして頻りに畫や何かを世の中に流行らせるやうな事を考へ色々な事をしまして一年の餘も経過した、そこで段々々々説いて大きくもやると云ふ事が知れて先づ此位のものである、其前に一つ準備をしなければならぬと言つて初て出来たのがあの圖畫取調掛と云ふものでありました、それが明治十九年^{一九〇六}と覺へます、圖畫取調掛と云ふものが出来て、初めは文部省の専門學務局の片方の部屋へ五六人寄集ることになつて居りますが、それでは何せ圖を作るの畫を描くのと言つても机一つでは仕様が無いと云ふので是は今の植物園の内へ移したそれが抑々此學校の前生であります、其植物園で其時分の畫では狩野芳崖先生、其次が友信先生此人は此頃まで生きて居ました彫刻で藤田文藏先生、そんなもので、私は詰り文部省に籍を置き乍ら其方の書記見たやうな工合にやつて居つた、それから其時分に面白いのは會計が餘程面白い、會計も何も合せて五人、小使二人であります、加藤景道、紫崎某其他は覺えませぬが、都合五人でありました、その圖畫取調掛が植物園に出来たので、其處へ

集つて色々な事を取調べると云ふので多くは畫を描いて居た、先づ第一に教育を仕なければならぬ、教育をするにどうして畫や彫刻を教へたものだらうと云ふのが是が一番最初の問題、どうも其時分に狩野家あたりで昔畫を教へたのはどう云ふ工合にして教へたかといふと寶珠の玉から教へると云ふ教方では都合が悪いと云ふやうな事で色々工夫しましたけれ共どうもそれを離れなかつた、最初は妙な御手本など出来ましたが、其時に色々な本に刷つて御手本など出来たのは抑々の最初です、そんな物を取調べて其間に畫の先生は何をして居るかといふと先づ描いて居る、彫刻の藤田文藏先生などは何をして居るかといふと頻りと粘土で何か拵つて居る、妙な物が出来た事があります、それで毎日／＼頻りに目を暮して居た、其明治十九年にさう云ふ物が出来まして其外に色々な事が有るので、忙しくて何でも二度宛植物園で辨當を喰べ、夜十二時分に家に歸つて來るので實は其時には餘程弱つた、未だ若かつたからそれが出来たが今では迎も出来さうにも無い、夜十二時分毎日々々根岸まで歸つて來る、夜まで何をして居たかといふと畫を描いてる傍で勝手次第に辨當を喰つてそれから茶を呑んだり何かして話を居たりしてどうやら斯うやら十二時々に歸つた、さう云ふ譯で何でも毎晩十二時頃に今の天王寺の墓場を抜けて歸つて來るのに道が知れなくて、手探りで漸く横町へ這入つたやうな随分眞暗な晩など其時分は弱りました、そのやうな事もあつたけれ共、其内に教育上色々な事が調べられた、それから今此處にお出での高村先生なども、それより少々後でありましたが彫刻の事は大分御心配になつてあの板のお手本など其時分に出て來ましたが、色々な物を大分調べたのでどうやら是

ならば畫や彫刻を教育することが出来るであらうと云ふことになつた。

處が最初我々の考で幾年で此學校を卒業したものであらうか、其時分に卒業した者は先づ畫でも彫刻でも先づ十年も経たなければ迎も出来るもので無い(笑)十年修業しなければならぬと云ふ事でありました、それは一同皆賛成で、十年の間學校に置く積り、それから十年を置いた處で迎も一人前になるには未だ足りない、少々悲觀した、そこでどうか之を出す工夫は無いか之を出す工夫は無い事は無い、處が少々弱つたです、此學校の外に製造所を拵へやうと云ふ計畫をした、それが明治十九年から二十年に係る間の考、學校の學科を卒へて十年の修業をした者を製造所へ引取つて又幾年か置いて夫れを一人前として宜いとし、初てそれが外へ出て一個人で出来るやうにすると云ふのが抑々の最初の考、處が十年案を森さんの處へ持出した處が忽ちそれは叱られて了つた、學校に十年置くなんてそんな事は不可い、學校は三年と定まつて居る、併し美術と云ふものは他の物と違ひ、迎も三年位置いても迎も出来やませぬ、イヤ出来なくても學校と云ふことにするならば三年だと斯う云ふ事でありました、それは弱つた、度々行つたり來たり色々やつたがナカ／＼承知されない、それから濱尾局長も段々考へた其十年と云ふ案は少し長過ぎると思ふがどうだと云ふやうな事になつた、どうしたつて技術は十年より下では不可ぬ、是はナカ／＼議論が喧ましかつたけれ共先づ十年案は遂頭廢案となつて了つた、そんなら先づ三年でやる、三年でやるに就ては猶製造所が必要だ、三年位で何をした處で一人前になる氣遣は無いから此製造所で長くやちければ本當の

事は出来ないと云ふ考であつた、それは實に今日から考へて見ると妙な話でありましたが其時には極く眞面目にさう考へた、それからして製造所を建てるならば何處か宜しいか、先づ此處へ學校を建てる、學校といふもの、最初から建てる積りでは無い、學校と云ふものは美術院の内の一部分としてやる積りだけ共ナカ／＼大臣の方がさうは通らないそこで學校と云ふものを先きに着手したら宜からうと云ふやうなことであつた、そこで學校は上野に限ると云ふので、上野の西軒寺へ置くと云ふことになつて、此處へ學校が出来ることに定まつた、斯う定まると製造所は學校の近所で無ければ都合が悪い、そこで根岸、其時分根岸の地面などは安いもので少々良い處で坪三圓五十錢の地面であつた、それから三河島へ行くと尙安い、一反で幾らと云ふ位だから三河島へ行かうか、根岸へ行くかと云ふもので、それに付ては金が要ると云ふやうな事で大分心配したことでありますが、何しろ製造所を拵へる積りが遂頭出来ず終ひになつて了ひましたからこれは丸つ切り形も出さないのでお終ひになつて了つた。

それで先づ學校の形造りをせんければならぬと云ふので一年ばかり過ぎて二十年でありましたらう、學校の勅令が出ましたのは、そこで學校の定まる迄は其間に餘程色々事があつた、それはどうだと云ふと一體此處は元と教育博物館が前から出来て居た其教育博物館を廢してそれを何處かへ引越さして此處へ學校を入れやうと云ふのでありますから、其内で大分彼は色々な悶着があつたので其間が大分長かつた。それで漸く此學校が教育博物館の跡へ出来た、其教育博物館が未だ残つて居る内に、今上陛下が未だ皇太子様で其處へ

お成りがあつたりして大きに狼狽して困つた事など大分ありますが、其實教育博物館と美術學校とどつち附かず此方では美術學校の仕事をして居る其傍には色々と教育品の陳列があると云ふやうな事であつたこともある、さうして學校と云ふものを形造つても未だナカ／＼生徒を入れると云ふ譯に行かぬ、それから此前に焼けましたのは——實は今日は斯うやつて結構な建築が出来ましたが——其學校は甚だ劍呑だと私などは思つて居つたのは元の教育博物館の柱の幾本か有つたのを切つて廣くして教場にした處が澤山ありました(笑) どうも柱が無いから天井が落ちるやうな事は無いかと思つたことがありますが、さう云ふやうな處でありました、それで未だナカ／＼生徒を入れる迄には餘程の準備が要るのでそれで暫くは學校の内では色々な物を拵へて見ました規則を作らねばならぬ、それから教則を拵へるとかヤア何だとか云ふので大分長らくの間學校の内では居たやうに覺へて居ります、其間が一年位あつたと思ひます、其學校の内では色々やつた後に校則が出来て明治二十二年に初て生徒を入れるやうになつたです、さう云ふやうな譯で元と此學校の出来ましたと云ふことは元來の目的とは大に違つて居る、元とは美術院と云ふものが出来て、美術院の一事業として此學校など有る譯であつた。元の考に依りますと學校のみで無い、先刻申落しましたが、博覽會、展覽會、今の文展のやうな物です或は當前の博覽會、是も矢張り今の美術院で取扱ふ積りでありますから、何と云ふ事は無い總て手で拵へる物は皆此美術院へ關係するやうな仕掛でありました、今日は美術工藝と云ふことは手で拵へます内にも這入る物と這入らぬ物がありますが、以前は駕籠を拵へるやうな事までも皆美術

院で之を統轄する積りで、それが日本中の技藝を統轄する、それは昔し繪所だの何だのと云ふものから起つたので、繪所の時分にはどう云ふ譯で繪所と言つたと申すと、此處で以て日本中の畫人の戶籍を統轄する、それで以て色々な仕事をして行けたことを見たり聞いたり致しましたものでありますから其積りで美術院を拵へやふと云ふことであつた、此處で美術學校の出来た後のことは皆さん御承知の方が澤山ありますから之を申し上げる事は無い、此處でお終ひにして置く。

そこで又もう一つ面白い話がある、美術學校の制服の御話と云ふものがある、あの美術學校の制服と云ふものは何時始めたといふと、是は其時分は秘密な樂屋のお話ですが、今日は茲で申上げる、岡倉君の考と云ふものは美術學校と云ふものを造る、造つても之を一時に方々に知らせなければならぬ、それには當前の服裝をして居つては不可ぬと云ふので何か面白い服裝は有りさうなものだ、それから色々考へて御相談に與かつて、西洋のモンヤナーヂの服は奇麗だから彼を着せたらどうですと言ふ、處が美術と云ふものは國粹保存を主とするのであつて西洋のモンヤナーヂの服裝などしては見識に障はるから不可ぬ、それから段々考へると興福寺に野見宿禰當麻毘速の畫像がある、今は有りませぬが昔は有つたか知らぬ、その寫しが傳はつて居る、此處にも大方有りませうが其像の服裝はどうです、至極宜しいです(笑) そこで股引を穿かして闕腋を着るが宜い、私は今日より着る、君も着る可しと、それから奈良の裝束屋に闕腋の股引から皆拵へさした、さうして着る岡倉先生は其日から着ると云ふ風で忽ち他の先生も皆拵へて着る事になつた、それから帽

子は何處から出たといふと、矢張り興福寺の野見宿禰當麻蹴速から出た、先づ是で置きます。(拍手)(十月四日本校設置
記念日講演筆記)

『東京美術学校校友会月報』第十八巻第五号。大正八年十月



岡倉覚三

岡倉覚三は上述の美術局設立運動を開始した明治十七年にはまだ二十二歳であったが、今泉雄作にさえこれほど才能ある者は少ないといわせるほどの鮮やかな手腕を既に発揮し始めていた。それが九鬼隆一や浜尾新に重用された所以であったといえよう。経歴を振り返ってみると、彼は文久二年(一八六二)に生まれ、横浜で育った。

父は旧福井藩士で、万延元年(一八六〇)藩の横浜商館手代となつて横浜に移住し、明治七年以降は東京で宿屋兼越前物産取次所を営んだ。覚三は八歳から英語を習い始め、東京外国語学校下等一級、東京開成学校(校長浜尾新)を経て東京大学文学部に進み、明治十三年七月に卒業した。在学中にはフェノロサの講義を受けた。卒業論文は「国家論」であったが、妻と痴話喧嘩して焼かれてしまい、急拠「美術論」を書いて出したという。ほかに、漢詩を森春濤に学び、奥原晴湖に南画を学び、また、琴を加藤校老に習ったともいわれる。東大卒業後間もなく文部省御用掛となり(同年十月)、音楽取調掛(明治十二年設置)勤務を命ぜられ、お雇い外国人メーンソン(Mr.

ter Whiting Mason 1828~97)の通訳その他の事務に従事したが、掛長伊沢修二(嘉永四年~大正六年)と意見が合わず、同十五年に専門事務局勤務内記課兼務へと転じている。

明治十七年に至って岡倉は美術局設立運動に着手する一方で、龍池会に入会し(録事となる)、鑑画会の結成に参加し、文部官僚として古社寺調査に出張し、また、図画教育国風化を目的として図画調査会の進行に尽くすなど、行動が急に活発になる。そうした行動の支えとなったのは文部少輔九鬼隆一であったと考えられる。

九鬼隆一は明治五年から文部省に入り、翌六年欧米に出張し、以後、文部少丞、文部大丞、文部大書記官を歴任した。同十一年にはパリ万国博に派遣され、任務終了後、各国の教育、美術等の状況を視察して帰国した。その後文部少輔となり、明治十七年九月に特命全権公使として渡米。帰国後、宮内省図書頭となり、博物館(當時は宮内省所屬)の拡充、臨時全国宝物取調局設置等、古美術保護行政の推進に努め、明治二十三年に至って我が国における近代的博物館の創始である帝國博物館の設立を実現させ、その総長に就任。岡倉は同館理事(美術部長)に抜擢される。

九鬼と岡倉との接触は、明治十五年、文部少輔の九鬼が学事巡視を行った際であろう。この時、岡倉も随行して新潟、石川県方面を巡り、帰路には京畿方面の古社寺を訪ねている。九鬼は当時から古美術保護について期するところがあったといわれる。明治十七年二月には、九鬼は再び学事視察(長崎、佐賀)に赴いたが、この時も岡倉が随行した。このようなことから岡倉は九鬼と親密になり、九鬼の片腕として古美術保護行政を推進してゆくことになるのである。